

思軒と抱一庵の翻訳と新聞編集（一）

—ヴェルヌ、ゴッティエ、コリンズ

馬場 美佳

森田思軒と原抱一庵はいわゆる師弟に近い関係であったといえるだろうが、また同時に、二人はともに翻訳と新聞編集にも関わり続けた者でもあった。そうした観点から、今回は抱一庵側の文章や資料を軸に、彼らの文学営為を整理していきたい。

一、思軒宛「炭坑秘事の評」の掲載—ヴェルヌ

思軒の訳業の前半における活躍の中心は『郵便報知新聞』（以下『報知』）だが、そもそも彼が翻訳小説を新聞に連載したのは、信頼をおく報知社社長・矢野龍溪が明治一九年九月に打ち出した新聞改良案（『改良意見書』九月一九日掲載）と深く関係していた。紙上に海外事情を紹介していくという方針は、欧化の時代に外国への関心が高い読者を満足させるものだった。とくに改良後から明治二二年にかけて、思軒が連載した一連のジュール・ヴェルヌの翻訳、「仏、曼二学士の譚」（刊行時改題『鉄世界』）、「天外異譚」「煙波の裏」「盲目使者」（刊行時改題『瞽使者』）「大水塊」「炭坑秘事」「探征隊」は、

その奇抜な世界観とストーリーの面白さが、改良のもうひとつの方針であった科学的知識の涵養とあいまって評判を呼んだ。これは啓蒙であり娯楽であると同時に、新聞という新しいメディアにおける文学との有機的なつながりの実践でもあった。そしてこの『報知』の実践にもっとも熱心に、なにより思軒の意を汲んだ批評をなしたのが抱一庵であったように思われる。

もともと『報知』の試みが読者に広く受け入れられていたことは、改良から数年間、とくに欧化の時代において『報知』の購読者数がトップを走り続けていたことでも知られる。このことが出版に関心ある当時の知識人たちにどのように見えていたのかも、明治二〇年八月に創刊したレビュー雑誌『出版月評』（月評社）にうかがうことができる。創刊の辞には「本評ハ実ニ我ニ於テ著書出版ノ批評ヲ専門トスル雑誌ノ嚆矢ナリ」とあり、定期刊行物にも注目し、新聞発行への目配りもある内容で、そこに掲載された河波清流なる人物による「日本諸新聞紙概評」（第二〇～二二号、明治二二年五～七月）で筆頭に取り上げられているのが『報知』であり、明治一九年の改良にも言及されている。

報知新聞が十九年の改革は独り其紙面と体裁とを改良したるのみならず併せて其精神氣骨を一変したるもの如し見よ其記事の体裁は社説雜報両ながら極めて平易通俗を旨とし、曾て奇洪の文字、佶屈の体を見ず加之新嘉坡通信の一項を設けジョーセフ、クラーク真に其人在るが如く為し巧に西洋諸国の小説を翻訳し以て看客幾千の心目を娛しまし今日に至るまで読者未だ通信の仮設を看破せざるものあるは機に投ずるの妙計能く其効を奏し得たりと謂ふべし是に由りて之を觀るときは現今の報知新聞は其文章、体裁両ながら大新聞の群を脱して小新聞の部類に入れりと為すも敢て妨げなかるべし

（『出版月評』第二二号、明治二二年六月）

『報知』が「十九年の改革」によつて「紙面と体裁」を改良したのみならず「精神氣骨」を一変したという指摘は重要である。末尾にあるように「文章、体裁」において「小新聞の部類」ではあるものの、そうは言い切れない何かがあったことにも大きく関わっている。欧米諸国の新聞調査を目的とした外遊によつて龍溪と思軒が検討・案出したものは、「小新聞」に似つとも明らかに性質が異なるものだったといえよう。たとえば漢字の使用数制限を基本とする文体改良ひとつをとつてみても、「小新聞」のいう「婦女子」に合わせるという感覚よりは、「大新聞」の担い手たちによる文体改良という意味合いが強く、政治に強い関心をもつ従来の読者にとつても新しい新聞文体を抵抗なく受け入れさせるものだったのではないだろうか。ま

た、翻訳小説掲載欄の名称「嘉坡通信 報知叢談」（『報知』紙上では字数の都合からか新嘉坡の「新」の字はほぼ略されている）について、実際に「クラーク」なる人物からの通信だと一部読者が信じ続けていたほどに、巧妙な設定になっていたというのも興味深い。この欄で最初に連載されたのが龍溪による翻訳「志別士商人物語」なのだが、『出版月評』第二〇号（明治二二年五月）の、新刊となつた際の本作紹介文でも、

報知新聞の兩三年前より新声価を添へたるは西洋小説の翻訳を掲載したるによる殊に新嘉坡通信たるの証明として掲げたる書簡及広告に奇想奇文幾万の読者を瞞着して喝采を博するの秘訣たり（『畧評』）

と評されていた。「書簡及広告」とあるのは、シンガポールに住むフランス人の大富豪が面白い話を提供してくれる世界中の旅人を求むという奇妙な「広告」をだしたので、その話をイギリス人通信員の「クラーク」が龍溪に通信しようと申し出たという内容の「書簡」のことで、架空の設定だった。だが、翻訳小説を掲載する欄を「通信」と名付けたとき、それは、この時期、書簡／電信／記事などの位相差を含みつつも、速報性と事実性を内容にまとわせる枠組みとなる。また実際、龍溪の弟・小栗貞雄をはじめ報知記者たちがロンドン等の欧米の主要都市から通信してくる記事も同時掲載されていたことからして、新聞が虚実皮膜を内包しつつ、「通信」で結ばれた世界で流通している最新の物語という情報を提供する面白さを

生み出す仕掛けでもあっただろう。いうなれば「通信小説」とよぶべき試みであり、新聞読者の関心を高める画期的な新しさがあったものと考えられる。

『出版月評』第四号(明治二〇年一月)には、岡倉覚三(天心)等とともに思軒もまた月評社の社友になったことが報告されており、この雑誌に早くから関わっていたことがわかる。『報知』における思軒翻訳に関する新刊書評としては、まず第三号(明治二〇年一月)に『鉄世界(集成館刊)の無署名の批評がみえ、海外の人気作家ヴェルヌを訳したこと、科学知識の学理に寄った「虚想」であることを評価している。また第一二号(明治二一年七月)に「警使者(報知社刊)評があり、これはエマーソン『文明論』(明治二三年)の翻訳者である佐藤重紀によるもので、内容、結構等を項目ごとに評した長文である。訳文については、「一種新創出色の文体にして行文極めて流暢といふを得ざれども軽妙にして綺麗なり而して其景色を叙する所最細心精筆描画真に逼り区々飛動直に雲影を望み水声を聞くの思あり」というように翻訳ゆえのぎこちなさはあるが精緻さが躍動感を生み出していること、ただし「欧文」の「諸辞文章の排列」における「の」の乱用が目につくことが指摘されている。佐藤の評も十分熱心なものといえるが、ただ新聞小説としての意図をすくい上げたものというわけではない。

こうした世評があったなか、思軒が紅苺園主人と号して『報知』に連載していたヴェルヌ「黒いインド Les Indes Noires」(一八七七年、英題「The Child of the Cavern」他)の翻訳「炭坑秘事」(明治二一年九月四日〜一〇月二八日)への感動を、新聞編集と翻訳との

観点から書き送ってきたのが、当時福島にいた抱一庵原余三郎であった。以下、思軒の死後、報知社時代について、とくに思軒を追慕して書かれた抱一庵の回想録「吾の昔」(『文芸界』明治三六年七月〜二月)を参照・検証しつつ詳しくみていきたい。抱一庵は、ちょうど『報知』が改良を打ち出した明治一九年から札幌農学校予科に在学し、ウィリアム・スミス・クラークに学んだ教員・大島正健に思軒のことを教わったという。大島は、英語教科書を使った授業のかわりに文学研究会と称し『報知』の「嘉坡通信」をとりあげ、とくに羊角山人(思軒)訳「盲目使者」(明治二〇年九月〜二月)につき、農学生を相手に「原文、訳文、是彼比較対照し、先づ原文の妙を称へ、次で訳文の批評に移り、訳筆の勁健にして而かも趣味ある、訳語訳字的的確動かすべからざる点々を讚嘆指摘し、滔々と息をも吐かず、美文論、訳文論を始めた」というように、かなり分析的に思軒の周密文体に考察を加えていたようで、以来、抱一庵は思軒の翻訳に熱中したようだ。かくして文学に目覚め、学校の方は落第・退学して福島の実家に戻ってくると、父が購読していた新聞が『東京日日新聞』から『報知』にかわっており、しかも「嘉坡通信」の愛読者になっていたの喜んでともある。ここには「報知」の広範囲に及ぶ影響の一端を垣間見ることもできる。

そうした「嘉坡通信」熱のなかで「炭坑秘事」評を執筆した様子も、抱一庵は次のように回想している。

炭坑秘事はおよそ七十回ばかりで終った、その結局を紙上に読んだ夜のことである、燈下に机を据ゑ、紙を展べ筆を把つた、

何か書く気なのである、まづ、当時天下の耳目を惹く所の問題を取て題目に命じたるは頗る働なるを讀め称へ、原書は仏国の文豪ジェル、ヴェルヌの作ならざるやと推測し、進んで訳法の謹嚴、訳語的確、これ空前の大訳筆なりと感嘆し、白玉の微瑕としては『去れり』『立てり』『行けり』等『り』字の語尾に余りに屢ばなるは煩はしと注告し、所望としては此警抜の筆を以て創作を出されんには、文壇の光采陸離、天下驚倒すべしと煽揚し、最後に、今や蘇峰出でて蘇峰宗起り、美妙出でて美妙宗起り、紅葉、露伴、出でて紅葉宗、露伴宗起り、然るに未だ天下に報知宗を見ざるは何の故ぞ、蓋し報知一派の文は陽春白雪なり、調高くして到底凡学者凡文人の模し得る所にあらざればなり、と云つた様なことを書いたのだが、イヤ、スラスラと出るは、書けるは、二十字二十行詰の紙十七八枚ばかりは、夕の六時頃から始めて、夜半の二時前に書き終つた

一晚にして書き上げた長文の細評を、翌朝何度も読み返してから投函し、それから「五日目」に思軒から返事が届いた。抱一庵がその内容を「吾の昔」に引き写したと思われるのが次の文面である。

御評御寄被成下浅からぬ御厚情と奉感謝候

過褒敢て当らず敢て当らず

近々御上京の由樽酒細に文を論ずるの日も可有之と楽居候

六日夕 思軒

抱一庵様侍史

日付に「六日夕」とあるので、一連の状況から明治二十一年一月六日の夕べに書かれたものと推定される。抱一庵はあまりの嬉しさに、友人知人に触れ回ったり、篆刻師に思軒の名を彫らせて贈つたりしたらしい。そして抱一庵の長文の書簡は、「炭坑秘事の評」と題して『出版月評』第一六号（明治二十一年一月二六日出版）に掲載された。ただし「吾の昔」によれば本人の知らぬ間に公表されていたという。「炭坑秘事の評」の内容は概ね抱一庵自身が回想に要約している通りなのだが、注目しておきたいのは、「読者」や「時代の嗜好」をとらえることを「作家の秘訣」とし、「報知」が、畝傍艦沈没事件を当て込んだ久松義典の「南洋遺蹟」、三池炭鉱問題を当て込んだ「炭坑秘事」を連載したことについて、「報知者の記者が常に機命に乗ずるに敏捷なるに敬服す」と高く評価していることだろう。また思軒の訳語についても「報知叢談の訳者が、直ちに原書の字句を写し出して然かも読者をして之れを味ひ置々倦まざらしむるの手段に長けたること」と、やはり読者の観点から評価する。つまり抱一庵の評を思軒が公表したのは、その熱心さのみならず、こうした新聞編集の問題、文学翻訳の問題という双方において、「読者」と「著者」のバランスに目を向けられる素質を見抜いたからではなかったのだろうか。

ほとんどの思軒への批評は翻訳の方法に費やされていた時期なので、抱一庵のような理解者は珍しく、やはり新しい世代の登場を感じさせる。たとえば、『出版月評』誌上でユゴーの翻訳を巡り直訳を誇る思軒に対し意見した、山居士（外山正一）の寄書「ザキクト

ル・ユゴーの訳者に望む」(第一八号、明治二二年三月)なども、思軒の翻訳法に特化した内容である。名指しは避けているものの明らかに思軒に対し、代名詞処理問題にかこつけた人格批判がなされ、思軒は「ト山居士ノ寄書ニ就キテ月評社ニ贈ルノ書」(第一九号、明治二二年四月)で、まったく事情を知らぬ人物の発言だとし、批評ならぬ中傷を許すべきではないと、むしろ掲載した雑誌の編集者に向かつて苦言を呈していた。ここにはそもそも「直訳」とは何か、「匿名」批評はいかなるものかという問題が横たわっていたといえる。思軒自身もまた明治二二年一〇月頃から『報知』紙上に「寓書」欄を創設し、記名で新刊書の書評をはじめているのだが、それはこうした批評の機運があったことだったのである。

このような批評の時代の黎明期において、思軒は新聞編集の意図とともに文学的関心を語り得る相手として抱一庵に改めて関心をもったのか、それとも報知社内でも新たな人材を必要としたのか、上京を促す書簡を認めたようだ。抱一庵は「吾の昔」で、記憶の中のその手紙が「余程鄭重懇切なる文面」であり「貴下は当時何をして居らるるのである、文筆に立触りたき思召などの動き給ふことあり給ふ歟、然らば葉研堀(注・報知社)へ遊びに来てはドーダ、悠々と文を商量しやうでは無い歟、矢野先生と話したこともある」といった文筆業への誘いだったと思いき起こしており、父親を説得し、「二週間の後」に、思軒と「文」を語り合うために上京したという。

二、最初の上京と「幽棲」——ゴージェイ

抱一庵は明治二二年の、おそらく九月中旬に上京したものとと思われる(理由は後述したい)。『報知』が条約改正問題に湧き、龍溪が紙上に弁舌をふるっていた頃である。「吾の昔」には、東京に到着した翌日、暴風雨のなか、ひるむことなく思軒宅へ向かったとある。

このとき二人ともに二十代、年齢差は五歳ほどだが、抱一庵は思軒に異様な威厳を感じたようだ。思軒は微醺を帯びた快弁で、政治・風俗・学校・新聞談、人物評、新著小説評に及び、一時間ほど語り続けた。帰り際、抱一庵は、さっそく思軒がロンドンで購入したという洋書を一冊貸し出してもらっている。その数日後、思軒から書簡が届き、抱一庵の処遇についてはすでに龍溪に見通しがあるので「一週間ばかりの中に新聞小説五回分ばかり書き先生(注・龍溪)の許に持ち行きて示されよ翻訳にても差支なし」というような指示を受けたという。さしずめ『報知』で小説を担当するための適性試験だったというところだろうか。この時期の『報知』の新人に村井弦齋もいたが、黒岩比佐子『食道楽』の人、村井弦齋(平成一六年、岩波書店)によれば、弦齋は龍溪に自分の文筆家としての才能を評価してもらおうと手紙を出し、龍溪はまた「弟子や若い学生たちを支援する情熱に燃えていた」ので、弦齋を呼び寄せ、作家になれと励まし、報知社の客員を経て編輯局で働くようにさせたという。おそらく抱一庵もそうした社員候補の一人だったのである。

さっそく翻訳する小説を検討したところ、思軒から借りた本はどれも面白くないといって小川町で見つけた「旅役者のもの」を訳すことにした。しかしこの翻訳、龍溪に認められず、「老杉空を銜いて」を「老杉空に聳えて」のように軟らかくせよと次々に添削され、書

き直しを命じられている。すでに「田舎新聞」で稼いでいた「村井」(弦斎)を見習うようにとも言われたようだ。だが、抱一庵は「田舎新聞」の小説を書かねば東京に居られぬと云ふなら、郷国に帰る方がまだだと反発し、思軒と「文」について語り合うために上京したのだから一度見てもらいたいと思軒のもとに持ち込んだ。思軒は、状況を見てとり、その翻訳に手を入れて、「幽棲」と題して当時編集主任をつとめていた雑誌『新小説』に掲載してくれたのだという(第一八〇二二巻、明治二十二年一〇月〜十一月)。「幽棲」の連載第一回に付された思軒による「小引」には次のようである。

去歳余の『炭坑秘事』を訳するや岩代に抱一庵氏なるものあり誤て之を愛読し乃ち細評一通を寄せらる余之を『出版月評』に致して其第十六号に登せり言ふ所溢美敢て当らざるもの多しと雖も抑も其辞翻々雅致あり亦た斯道に心有るの人なるを知る頃日東京に遊び旅窓仏国小説『司公殺』一篇を訳し示さる原作既に妙訳文亦た佳青燈の下以て飯後茶余の供に充るに足れり偶ま唐の李習之の集を読む其皇甫湜に答ふるに云はく「僕口に曾て文を言はず祇だ以て謗を招き物に忤ふに足るのみ」と今齋だに謗を招き物に忤はざるのみならず且喜で共に之を話し之を講ずるの士を得るとせば則ち其快果して如何ぞや

十月二日夜

思軒居士識す

思軒の「小引」の日付から、先に述べた抱一庵の上京が九月であるという逆算が可能になる。最初の抱一庵への返書を彷彿させる内

容で、「炭鉱秘事の評」には過褒の部分もあるが、文学に「心有るの人」であり、ともに語り合うことができる人物だとし、抱一庵を見出した喜びを述べている。この掲載が思軒の独断ではなかったらしいことは、『新小説』を当時思軒とともに編集していた須藤南翠の回想から確認することができる。

(注・思軒は)織長き指には大きシガーを挟み、机上に一卷の稿本を致して、語りていはく、こは仏蘭西小説『司公殺』の反訳なり。是れ恐らくは訳者の初登山なるべきも、訳法の精確、行文の豊麗、所詮かいなでの作家の及ぶべき所ならねば、即ち『新小説』に採録せまほしくて、君(注・南翠)の一閱を煩はずなり。去年『新刊月評』の第十六号に、抱一庵の名を以て余が『炭坑秘事』を細評したりしを記憶すべし。姓を原、名を余三郎と称び、頃日東京に來遊し、客窓のつれづれに此訳ありしなり。遠く文学を攻め、才華横溢、吾曹の知己たるを信ずれば、更たためて同行することあるべしと。

(リットン著・原抱一庵訳『聖人歎盜賊』上
明治三六年刊所収、須藤南翠著「序」より)

抱一庵の訳書の序に与えたものである点を差し引くとしても、また実は思軒がどのレベルで抱一庵の文章を添削したのかなどもわからないのだが、すくなくとも思軒が、「炭坑秘事」の細評の熱心さを高く評価し、文学に志が有る人物と見込んで、南翠に「幽棲」を推薦したのは事実なのだろう。

抱一庵は『報知』連載五回分くらいのもりで訳したようだが、『新小説』では「外篇」欄に全四回に分載された（この附録的欄は、抱一庵曰く、思軒や南翠ら主要メンバーである「同好会」以外の書き手の作を載せていたという）。また本作は、抱一庵の翻訳にもいくつかある原著不明作のひとつであるが、今回の調査で、テオフィル・ゴティエの「キャピテン・フラカス *Le Capitaine Fraresse*」（一八六三年）の英訳からであることが判明した。先に引用した思軒の「小引」には「シゴナ、コツク」と誤記もしくは誤植されてしまっているのだが、「幽棲」の本文には「シゴク、ナツク」とあり、これは主人公の男爵の名 *Sigornac*（シゴニヤック）である。現時点の調査では、英訳タイトルが主人公名になっている書籍を確認できていない。全二二章ある長編の一、二章のみを、かなり抄訳したものになっている。「吾の昔」のなかで抱一庵は、美妙や紅葉、露伴流には書けないが、思軒流でやってみたところ、スラスラと書くことができたといっている。一部翻案もしており、思軒流の文体を模し、周密文体風に読むことができるものに仕上げたということなのだろう。

この小説は、零落した田舎の男爵「シゴクナツク」という青年が老僕と犬と猫とともに荒れ果てた屋敷に寂しく暮らす姿からはじまる。そこへ嵐の夜、旅役者の一団が宿を請うのだが、彼らとの出会いが、主人公をバリへと向かわせる。貴族ゆえの自尊心やプライドが旅役者との同行をためらわせるも、それ以上に孤独に生き続けることから逃れたいという想いから、王に先祖の功績を認めもらうために旅立つのである。原作はブルボン王朝創世期のルイ十三世の世を舞台にしていることを冒頭で明示しているが、なぜか抱一庵

はそれを訳出していない。没落した主人公が、はからずも俳優となって兵士を演じることになる姿は、明治日本の没落士族の心性を思わせもする。もともとは新聞小説を書くか、訳すかしてみよと言われていたところからすると、ユゴーと同時期のロマン派の作家ゴティエに目をつけ、フランス王政から脱する人間の物語を選択したことは時機を得ていたといえるだろうし、また「読者」という呼びかけが見られるところにも新聞小説への志向がうかがえるように見受けられる。

ともあれ「幽棲」は、本来の対象であった『報知』に掲載されることなく、呼び寄せた思軒の配慮から雑誌に掲載された（報酬は雑誌の方が高かったようだ）。本来抱一庵は、思軒の翻訳に熱中し、『報知』の試みにも共感していたはずなのだが、その内容や文体はいまだ読者には開かれていなかったようで、このことのギャップを自覚するのはもう少しあとのことになる。

三、半月だけの翻訳係——コリンズ

ところで、まだ抱一庵が福島の実家に居た明治二十一年一月から翌年の五月にかけて、『報知』に「臥禅居士」という署名による小説が一二作掲載された。どれも原著不明とされてきた短篇だが、近年の調査によって海外の新聞雑報からの翻訳であるという実態が明らかになってきている（拙論「新聞編集者・森田思軒と漂流する物語」『日本近代文学』平成二十九年一月、参照）。この臥禅居士について柳田泉が『明治初期の翻訳文学』（昭和一〇年、松柏館書店）の

なかで、抱一庵説を唱えているのだが、これは明治二十一年に二人が書簡をやり取りしてまもなく抱一庵が上京し、『報知』を手伝い始めたと推測しているからで、実際には上京までに一年近くの間が空いている（「吾の昔」の記述に曖昧な部分があったり、『国民新聞』の明治二三年の発刊を二二年とするなどの記憶違いが見られたりするものも誤解の原因かもしれない）。その後の思軒にかんする諸研究においては、とくに言及はないものの、臥禅居士については、思軒だと大勢は判断しているようである。筆者もまた、臥禅居士訳の短篇群は、判明した原著と比較してみても、一字一句をゆるがせにせず、英語に対応させようとする直訳志向ゆえに、思軒による翻訳の可能性が高いと考える。なにより「幽棲」の掲載時期からみても、抱一庵の上京は明治二二年九月頃とするのが自然といえ、すくなくとも前年の二十一年の末に抱一庵が『報知』の仕事をしていたと考えるのは難しいだろう。ただ柳田の誤解は、二二年にウィルキー・コリンズの「月珠」^{「ハレストン」}を訳した「省庵居士」もまた抱一庵ではないかという推測となり、その訳がいかに思軒の文体に似ているかという指摘につながっている。だが実は「月珠」が「逐語訳的」だという柳田の指摘こそが、まさしく思軒その人の訳であることを証明しているといえ、抱一庵の翻訳は「幽棲」をはじめむしろ豪傑訳であるにもかかわらず、思軒流の周密文体を模倣して書き上げられているのである。ただし、もうひとつ柳田が混乱する理由があったとすれば、龍溪が抱一庵を報知社の翻訳係に据えた時期の問題が挙げられるだろう。

抱一庵は、「幽棲」を訳しはしたものの、上京からひと月以上、思

軒にもろくに会えず、無為に過ごしていたと記している（おそらくこれが明治二二年の一〇月から一月上旬のことになる）。そうして再び龍溪に呼び出され、「田舎新聞の小説書」ができないならば「報知社の翻訳主任」に一人欠員があるから、「外国の新聞を見たり、メールの電報でも訳して下さい」と指示され、意地から請け負うことになる。だが英語に難儀した上に、龍溪も思軒も原稿しか送ってこず、「偕に文章を商量す」どころではなかった。一月だと思軒がまだ本所小泉町にいた頃なので（一二月一四日付『報知』朝刊に下谷への転居挨拶が掲載されている）、その自宅へ何度も通ったがもともと話ができず、「校正の地位より低い」という翻訳係にどうにか「十四五日間出勤」したものの、月末の給料の安さに辟易し、報知社を飛び出し福島に戻ったのだとある。つまり抱一庵の最初の上京の際の報知社での翻訳係の期間は、明治二二年一月中旬頃から半月だけであり、一月上旬には社どころか東京からも去っていたということになる。間に一年空いているとはいえ、臥禅居士による短篇群の出現と、抱一庵が翻訳係だった月がいずれも一一月だったこと、そして何より抱一庵の文体が思軒流であったために、柳田のような誤解が幾重にも生じやすい状況になったものと思われる。かくして抱一庵が翻訳係だったのはたった半月だったわけだが、はじめて思軒と同じ『報知』で新聞編集にかかわった時期ともいえ、とくにコリンズのブームを紙上に起こすことに一役かっていたことに注目しておきたい。

コリンズについては、すでに黒岩涙香が翻訳していたが、思軒も「夢中夢 *Percy and the Prophet*」（明治二十一年一月二日～二五日）

を『報知』紙上で翻訳済みで、ヴェルヌと並行して注目している作家の一人だったといえる。そして思軒は、省庵居士の名で「嘉坡通信 報知叢談」欄にコリンズの「月長石 *The Moonstone*」(一八六八年)を「月珠」と題して翻訳した(明治二年六月二八日〜一月一〇日)。だが「月珠」連載中、おそらく抱一庵が上京した頃の九月二三日にコリンズが亡くなっている。続いて一〇月一八日には、『報知』の重要な後ろ盾であった外務大臣・大隈重信が玄洋社の来島恒喜に襲撃された大隈重信遭難事件が起きたために、「月珠」掲載が一時中断している。

中断から約一週間後、一〇月二五日に無署名の「小説家ウエルキイ、コリンズ氏逝く」という英字新聞からの追悼記事の翻訳が載った。これは時期的に見ておそらく思軒の訳かと思われる。それから四日後、思軒は、「思軒居士」の署名で「月珠続稿に引ず」(明治二年一〇月二九日)を発表し、「吾友省庵が訳せる月珠一篇」として中断の理由と連載再開に向けての考えを読者に示した。一大事件が生じたとき、新聞という世俗の動きに敏感に反応するメディアにおいて、小説は居心地が悪いという思いがあるようだ。これは数年後の濃尾震災のときの『国民新聞』紙上の美妙の反応や、日露戦争のときに『読売新聞』の「天うつ波」連載を中断した露伴の反応も同じである。だがここで思軒は、「続稿」を願う声を機に、「陣中に在りて常に左伝を講ぜる室町のむかし」のことや、四五年前のロンドンにおいてグラッドストーン内閣の更迭と議員解散の騒動のとき、テニソン詩集が発刊され三千部では足りずに二万部を売ったという話など、古今内外の逸話をあげ、「悠々たる社会何れの時か一段の

文学趣味無からん」と、進歩した社会と文学の成熟した関係を願い、連載を再開することを選んだ。これは新聞を舞台に活躍し、社会との関わり方が密接に感じられる作家にとって、文学者としての立ち位置が問われる近代的な問題であるといえよう。

そして思軒は「月珠」を再開し、一月一〇日に第一編までを訳し終えた。すると一月一三日から一五日にかけて、「抱一庵主人」という署名入りで「ウエルキイコリンズ氏の小説談」の翻訳が載った。時期的に見て、抱一庵の報知社での記名による最初の仕事であろう。どの記事を訳して載せるかは自由に選択できた様子が「吾の昔」からうかがえるので、さっそく文学的な記事を翻訳したいと思つてのことだろうか。英国雑誌に掲載されたという追悼記事を訳したものとある。先の英字新聞からの追悼記事を意識してか、「本社纂きに氏の小伝を訳載し之れを読者に報じ甚だ遺憾なきが如しと雖も」と前置きし敬意を払っているのは、思軒がそれを訳したことに配慮した物言いになっているからだろうか。また「本邦今日の文家を警世するに足るもの」「今や氏の傑作『月珠』の一書、省庵居士の訳によりて連日読者の愛読を辱ふする傍はら茲に氏が平生の行為及び氏が得意の文談を掲ぐ豈に必ずしも無用の業と云んや」というように有用無用に言及するのは、思軒の思考に近く、大隈の事件を意識しての言葉と読める。「吾の昔」の回想からだけではうかがい知れないが、思軒の文学観に影響されていたのかもしれない。「小説談」の内容は、コリンズが文学と社会について積極的に発言していることを示すものであった。そして末尾には、抱一庵の次のようなコメントが掲載されていた。

訳者曰く近き頃小川街のほとりをそぞろ行ける折一書店にコ
リンズ氏の著書の読み古るしたるが乱映の間にまつわり居れ
るを睹、本邦にも又氏の愛読者あるを知り転た悦の情に堪へ
ざりし本邦にも一日も早く氏の如き著書を見るの明ある読者
の出で来らんことまことに望ましき次第なり

こうしてみるとコリンズを評価できるような「明ある読者」の一
人として、いかに抱一庵が思軒に私淑し、同じ文学を語り合うこと
をもとめていたかが伝わってくるようにも思われる。

思軒の「月珠」は、読者に続きを約しつつも、結局未完のままとな
る。一月二日付夕刊に広告が掲載されて次に連載がはじまっ
たのは抱一庵による「衛士」(明治二二年一月二五日〜二月八
日、原著不明・調査中)であった。アメリカ南北戦争もので、ミズ
ーリ州の激戦地スプリングフィールドを舞台にし、歴史上の人物た
ちも登場する。前掲の柳田が言うように、「可成り面白い活劇を生じ
さう」なのだが、残念ながら発端で中絶している。この理由は先に
も述べたように、抱一庵の出奔のためだろう。抱一庵としては「偕
に文章を商量す」ための上京が、何ヶ月たっても実現しないことへ
の不満が大きかった。思軒は抱一庵が去ったあとも『報知』にコリ
ンズの「財の行くへ *My Lady's Money*」(明治二三年三月三一日〜
五月一七日)を翻訳しているが、これも未完であった。はたして抱
一庵はこの連載を目にしていただろうか。

抱一庵が出奔して約半年後の明治二三年七月、『報知』の編輯局の

体制が見直され、思軒が編集主任として大きな権限を持つようにな
ると(七月五日から)。「改良」告知は四日付で掲載、抱一庵は思軒
に呼び戻され、翌二四年には思軒のあとを継ぎ「月珠」の続稿をな
し、そしてその後もコリンズを好んで翻訳していくことになるので
ある。

(この稿、続く)

*本研究はJSPS 科研費(19K00290)の成果の一部である。